

(21) 貝毒対策としての海底耕耘効果調査

予算

民間受託

概要

大阪湾東部海域（大阪府海域）では麻痺性貝毒原因プランクトンの増殖規模は年々拡大し、2006年には底曳き網漁業で重要な漁獲物であるアカガイで、2007年にはトリガイで初の毒化事例が確認された。近年では両種がほぼ毎年毒化するとともに毒化期間も長期化し、2018年には2月中旬から9月中旬まで半年以上出荷自主規制の措置が執られた。そのため、麻痺性貝毒による漁業被害を防止するための早急な対策が求められている。そこで、貝毒が発生する前（1月下旬～2月）に海底に沈んでいる無毒な珪藻（プランクトン）を海底耕耘により巻き上げ・増殖させ、競合によって貝毒原因プランクトンの増加を抑制することが可能か効果を検証した。堺市および岸和田市沖において計3回の海底耕耘を実施した結果、2021年春季の*Alexandrium tamarense*^{※1}の増殖は低レベルで推移し、二枚貝の毒化も確認されなかった。2021年の結果は昨年と同様に、貝毒対策として十分な効果を示したように見えるが、比較対象を設けることができないため、原因プランクトンの増殖抑制効果について確からしい評価を行うには、事例を重ねることが必要である。

※1 現名称は*Alexandrium catenella*

担当者

辻村裕紀、中嶋昌紀、近藤 健、田中咲絵